



ブリュッセルの有名な観光スポット グラン・プラス

複雑な小国・ベルギー

欧州の「南北問題」と聞くと多くの人は豊かな北欧と南欧の対立構図を思い浮かべるかもしれませんが。でも実はこの人口約1,170万人の小さな国ベルギーにも「南北問題」は存在します。ベルギーの言語分布は「フランダースの犬」の舞台として有名な北部フランドレン地域がオランダ語圏、南部ワロン地域がフランス語圏で、ドイツとの国境付近に小さなドイツ語圏が存在します。北部は南部に比べて裕福であり、なぜ裕福な自分たちが南部を支えなければならないのかという不満から、北部の独立を主張する人々も存在します。

EU（欧州連合）の本部や私が勤務するJCIF（国際金融情報センター）の事務所がある首都ブリュッセルでもそうした「南北問題」を感じる機会があります。地理的には北部に位置するブリュッセルですが、実際に中心地を歩いていて耳にするのはほとんどがフランス語です。道路標識や公共交通機関の表示はフランス語とオランダ語を併記していますが、商業施

設やスーパーでの店員さんの声掛けはフランス語以外を聞いたことはありません。そしてこちらがフランス語がわからないようだ、と悟った店員さんが次に話す言語は英語。オランダ語ではありません。

北部出身のこちらの知人の不満の一つは「首都に住むベルギー人の多くが、外国語である英語は理解できてもオランダ語を理解できない」ということです。「私は自分の国で母国語を話そうとしているだけなのに」という彼女の嘆きを聞く度に、こうした言語・文化的に不利益を被っているという意識が「南北問題」の不満の背景にあるのかもしれない、と想像します。

今年は総選挙が実施される年であり、当事務所としても各政党の主張や世論を調査していく方針ですが、個人的にもこの国の歴史・文化に対する理解をもっと深めていきたいと思っています。

（国際金融情報センター、ブリュッセル）

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



ブリュッセル中央駅にてオランダ語とフランス語が併記された案内板